

豊かな感性を育む音楽教育 幼稚園から小学校低学年につながる音楽活動

Music Education that Nurtures Abundant Sensibility: Music Activities Starting from Kindergarten to Early Elementary School Years

崎 元 りずみ*
(平成29年10月25日受理)

要約

豊かな感性を育み、一人ひとりが思いを持ち表現し他者とのコミュニケーション力を高めることが、学校教育において求められている。幼児期において様々な音や楽器に触れ、音楽の良さを感じることは、感性豊かな子どもの育成につながると思う。子どもたちが興味を持って音楽にかかわり、生涯音楽を愛好していくような教育現場での音楽活動のあり方について考察するものとする。

キーワード：表現活動、日本の音楽、物語と音楽

keywords：Expression, Japanese music, Story and music

1. はじめに

我々の日常には音が溢れている。家の中にいても外に出かけても常に様々な音が鳴っている。耳に入ってくる音は、無意識で、何も感じない音である。時に大きすぎる音に関しては不快感を持つこともあるが、それもその時々環境によって左右されるものである。しかし、誰もいない静かな場所でふと聞こえてきた音に、心が動く瞬間がある。それが、鳥のさえずりや雨の音のような自然界のものであったり、遠くで聞こえる電車の音や人の声であったりすると、どことなく懐かしさや感動を覚えることがある。感動、すなわち心が動くことで、頭の中にイメージーションという特別な世界が広がってくる。人にとって想像するということは、表現活動の源である。生まれたばかりの赤ちゃんが音に反応し笑顔を見せてくれるのは、本当に微笑ましいことである。子どもは本来音に興味関心を持っている。また、触ったり叩いたりして音を出すことを楽しむ。このように音を聞いて心が動き自ら音を出すことを楽しむことは、自己表現の第一歩である。幼児期に様々な音や音楽に触れて成長することは、豊かな感性を

培っていくものとする。幼稚園や学校教育現場における音楽教育は感性を育む人間教育と捉え、常に新しい発見や感動を伴う活動が望ましいと考える。そのために指導法の工夫や豊富なバリエーションを指導者が持つことが必要とされる。子どもたちが表現活動を楽しみ、他者とコミュニケーションをとり、互いの良さに気づき合える活動を音楽教育現場において行っていきたい。ここでは、音楽活動の中でのコミュニケーションや、わらべ歌、日本の音楽、物語と音楽のコラボレーションなどの実践指導例をあげていく。

2. 幼稚園や小学校における音楽

幼稚園では、日常生活のあらゆる場面で音楽と関わっている。大きな声で口をあげて歌う姿は、微笑ましいものであるが、その楽しんでいる姿こそ心の解放である。園児のほとんどはピアノの音が鳴ると自然に体を動かし、笑顔で歌い出す。本来子どもは音楽に興味がある。幼稚園までに色々な音に親しんで、楽しむ体験を積むことで、自然に抵抗なく歌うことができる。もちろん音程については、まだまだ音域も狭く、声に出せる音も限

(*さきもとりずみ 保育科講師 音楽)

られているが、子どもの頭の中では音程のイメージはあり、成長に伴って音域も広がってくる。リズムについても、運動機能と同じようにリズムに興味がある幼児期にたくさんのリズム遊びの経験をするのがよい。歩く、走る、スキップ、ギャロップ等体を使う活動で音楽を伴うことは、体を動かす快感に、音楽に合わせる楽しさが加わり、相乗効果が期待できる。子どもたちの興味を促すため、かめ、猫、チーター等動物になったつもり動作を伴う遊びも面白い。また、自分の体を使って音を出すボディーパーカッション、手遊び歌もよい。指先を動かすことは、神経を集中させる。その脳への刺激も子どもにとって、心地よいものである。刺激に関して言えば、視覚、聴覚も合わせて行うとさらによい。絵本や音楽を聴いて動く、自由表現をする等がそれである。絵や絵本は、想像力を豊かにしイメージを広げていくことができる。大切なことは、色々な場面においてイメージを頭に思い描くことができるようになることである。そして、心で感じ取ることである。この二つのことが豊かな感性を育むことに繋がる。色々な楽器を使うことも大切である。音の出るものへの興味は大きい。子ども自らがそれぞれの思いを持ち音を出すことが音楽の表現活動である。友だちと互いに音を出し合い、聴き合う活動では、互いの思いを受け止めることや、気づくことができる。このことは、コミュニケーション活動につながる。言葉によるコミュニケーションがまだ十分でない幼児期において、音のコミュニケーションは、感覚的な部分である意味子どもにとって容易な方法とも考えられる。

3. 音楽による対話（コミュニケーション）

実践例① まねっこ遊び（指導者と子ども）

4拍ぐらいの簡単なフレーズから始め、慣れてきたら8拍（2小節程度）に伸ばす。

少しずつリズムを変えて行う。強弱をつけて行う。この時に大切なことは、聴くことに集中するとともに、相手の顔を見ながら行うことである。また常に拍を感じながらリズム打ちをすることで、手拍子によるリズム遊びだけでなく、階名

唱や、リコーダーでも同様な活動ができる。

実践例② 交互奏 ペア活動

2人で旋律を交互に演奏する方法。1、2小節を交代に演奏する。この活動では、互いの音を聴き合って演奏する中で、音をよく聴き、フレーズ感も自然に養われてくる。ペアを入れ替えているいろいろな友達と行うと楽しさも広がる。活動の前にコミュニケーションを意識するような子どもへの助言も大切である。自然に身に付く部分と、意識づけされて学習できる部分とがある。すなわち、活動のめあてをいつも明確に指導者が持つということである。

実践例③ 鍵盤ハーモニカによる交互奏

（小学校低学年）

鍵盤ハーモニカは幼稚園でも取り扱っている園が多い。また小学校低学年では個人持ちの楽器として親しまれている。他の鍵盤楽器への導入や音感教育に効果を上げているが、鍵盤ハーモニカは演奏の仕方によっていろいろな音色を出すことができる。弦楽器のような響きのある音や、華やかなトランペットの響き、日本の笙のような音も出すことができる表現の幅の広い楽器である。この楽器の特性を知り、自分の息を吹き込み音に出すという点がより自分の表現に密接であることを指導者は認識したい。



写真1) ペアで鍵盤ハーモニカの交互奏をする活動



写真2) 鍵盤ハーモニカ交互奏の発表

小学校では教科としての音楽が行われている。音楽を親しむこととともに、音楽の要素(リズム、旋律、ハーモニー)音楽の構成などをカリキュラムに従って学習していく。幼稚園と同様に、学校生活全般において音楽が色々な形で取り入れられている。学校生活の1日のリズムとして登校時の音楽、朝の会の歌、給食の音楽、清掃の音楽、帰りの音楽がある。これらはBGM的な要素も含まれるが、生活にメリハリをつけ、気分の切り替えにもなる。朝の会で声を出してみんなで歌うことは心の解放にもなり、学級経営の上でも成果を上げている。また、学校全体で行う音楽集会での合唱もある。異学年と声を合わせて歌うことで、下の学年は上の学年の歌声に憧れ高学年としての自覚を持つようになるなど、集団の中で学び合いも期待できる。行事としては、音楽会、運動会や、入学式、卒業式などの儀式的行事である。音楽会は、クラスや学年単位の合唱や合奏を通して演奏や鑑賞の楽しさを体験する。時間をかけてじっくり一つの作品に取り組むことは、日々の練習の積み重ねや努力を要する。その過程を大切に、発表できたときは達成感と自信、次の目標設定へと前進する。また、音楽は、演奏する側と聴き手があり、演奏する側は聴き手を意識し、互いの思いを伝え合うことができる。聴き手が異学年であったり、保護者であったりする場合、そこに演奏者である子どもの大きな成長が期待される。発表する子どもたちは、自分たちが頑張ったことへの評

価をいつも期待しているからだ。指導者は互いの鑑賞において、友だちの良いところや感動したことを共有できるような指導を取り入れるようにする。運動会、卒業式等の行事についても同様である。出来栄えや見栄えだけを気にかけて、子どもたちの満足度を二の次にしないように、練習過程や、めあての設定の重要性を十分に考慮することが大切である。教室や学校の中の活動にとどまらず、他校や地域との交流もよい。幼稚園と小学校、中学校との交流、地域のコミュニティーとも交流、特別支援学校、施設との交流などがある。交流計画のプログラムに歌や演奏などの音楽を入れると、限られた時間の中で、心のつながりが深まっていき、環境の違う社会への理解にもなる。



写真3) 校内の金管楽器の演奏会



写真4) 老人会でのふれあい活動のリコーダー演奏

4. 日本の音楽に親しむ

子どもたちは様々なメディアから音楽を聴いている。その音楽のジャンルも多様化している。幼児期に出会う音楽は、生涯に渡って印象に残るものでもある。そこで幼児期や、小学校で日本の古くから伝わる童謡や唱歌、日本特有の楽器に親しむことはよい。日本には四季があり、人々は季節の移り変わりやその豊かな自然の営みと共に生活をしてきた。童謡や唱歌の歌詞の中には、その様子を歌われたものが数多くある。また、当時の楽曲は、言葉の抑揚に合わせて音の高低がつけられており、歌詞の様子を生かした旋律等が特徴的であるので、歌いながら自然に様子を想像することができる。遊びの中で生まれた遊び歌も、音程の幅が狭く言葉に抑揚がつけられた感じの歌であったり、話し言葉に近い音程であったりするので音域の狭い幼児であっても親しむことができる。遊びの中での体験は幼児期に大切にしたいことである。「かくれんぼ」や「はないちもんめ」は集団での遊びである。道具を使った遊びには、「まりつき」「おおなみこなみ」などがある。歌のリズムに合わせて体を動かす、このことは音楽的にもリズム感を自然に身に付けていくことができる。また遊びを通して友だちとの関わりを持つことができる。最近の子どもたちの遊びをみても、ほとんどの子どもが家の中で、ゲーム、チャットでバーチャルな遊びをしている。画面の中で体験する景色や会話は、作られたものである。自然の空気感や息づかいが感じられるような空間であって初めて想像力や感性が育つと考えられる。やはり自然の中で音を楽しみ遊ぶ体験を幼児期には大切にしたい。また、外国の文化に触れるとともに、母国の伝統や文化にも親しんでいくことがグローバル社会では大切である。身近なものとして、地域に伝わるお祭りや、お正月、節分などの年中行事である。お祭りでは、太鼓や笛、踊りなどがある。おみこし、お囃子、子どもたちも参加することができる。幼稚園や学校でそのような楽器や演奏を取り入れることも積極的にして親しむようにしたい。

子どものノートより感想

2年生

「かっこう」

森の自然を感じさせてくれるから心にのこりました。

「ぶっかりくじら」

ぷっかりが気持ちよさそう。

やわらかい感じがするよ。

くじらは空が海だと思って浮かんでるんだね。

「えがおできょうも」

元気がないときでもこの歌を歌うと元気になれるよ。

3年生

「春の小川」

草や花がいっぱい。色もきれいな様子。

小川が冷たくて気持ちいい。

小川のまわりの花や草がゆれてる。

ぽかぽかあたたかい。

れんげの花というところは、れんげの花であふれている感じがするよ。

空気がおいしそう。

4年生

「とんび」

ピンヨローの所を歌っていると、教室の外でほんとうにとんびがうたっていました。ほんとうに鳥になったみたいに歌いました。

ひびくような声で歌いました。

とんびが鳴いているところや飛んでいるところを想像して歌いました。

様子を思い浮かべながら歌うとで、子どもたちはさらにイメージを広げ、心に感動を覚える。

5. わらべ歌、日本の音階に親しむ

音階的には、長音階でも短音階でもなく、日本特有の音階である。地域によって多少旋律が異なるが、5音音階であったり、音域が5度内であつ

たりして、歌い易い。

**実践例④ 交互唱をし、
コミュニケーションを楽しむ**

「はないちもんめ」

2列になり手をつなぎ、互いに向き合って交互に歩きながら歌う。横につながった列の仲間意識や、相手グループとのことばのやり取りを楽しむ。

「手まり歌」

あんたがたどこさ ひごさ
ひごどこさ くまもとさ
くまもとどこさ せんばさ

まりつきをしながら、動きに合わせて歌いながら遊ぶ。遊びながら拍の感覚が自然に身に付く。

「おちゃらかほい」

せっせせ のよいよいよい
おちゃらか おちゃらか おちゃらかほい

はやしことばのように特に意味はないが、言葉の抑揚やリズムを楽しむ。

2人向き合って手を取り、音符のあるところは、双方が手のひらを合わせ音を出し、休符の所では「ほい」と掛け声を言い楽しむ。2人で息を合わせることを楽しむ。

友だちと手を触れ合う動作は心をつなぎ、コミュニケーションの第一歩となる。

「ずいずいずっころばし」

ずいずいずっころばし ごまみそずい
ちゃつぽにおわれて
とっぴんしゃん

ことばにリズムがあり楽しい。数名で輪になり両手で筒をつくり、リーダーが歌に合わせて指を手の筒に入れていく。これも拍を感じながら行う。また歌詞の言葉のリズムは、スキップのように跳ねる感じや付点のリズムで緩やかに伸ばすところがあり、いろいろなリズムの心地よさを感じ

ることができる。

このように幼児期に遊びの中でわらべ歌を歌うことは、楽しみながら友だちとコミュニケーションをとることになり、人間関係を自然な形でつくっていくことができる。またアイコンタクトをとることや、相手の息づかいを感じ取ることも覚えていき、学習の中でも遊びを交えて取り入れることができる。小学校低学年の音楽科の授業においても、導入に少人数や2人組みで向かい合って手遊びを取り入れることができる。

3年生の「茶摘み」(文部省唱歌)でも2人向き合って行う。授業の導入の5分でのこのような活動を入れると子どもたちは笑顔になり心が解放され想像力も働き、表現の楽しさを感じることもなる。常時活動として行うのもよい。

**実践例⑤ 日本のふしを作ろう
5音を使ってリコーダーを吹く。
(レ・ミ・ソ・ラ・ド・レ)**

- ・隣り合った音を好きなように並べる。
- ・できたふしをリコーダーで吹いてみる。
- ・伸ばすところや短くするところを工夫する。

このように始めに音を限定しておき、音の跳躍も避けると、自然な歌い易いふしになる。リズムに変化をつけると、気分が変わる。実際にリコーダー等の身近な楽器で作った音を出してみると、その響きに驚きや発見がある。

- ・できたふしをつないでみよう

ともだちとつなぐことで短いフレーズが長くなりさらに驚きも増す。



5音音階による日本のふし(児童作曲)

高学年では箏とのコラボレーションもバリエーションに加えたい。

- ・箏を自由に鳴らし、好きなタイミングでリコーダーのふしを重ねる。

・箏のふしも工夫する。

その際、リコーダーと同様に隣接する弦を使ってふしづくりをすると容易である。

また、箏の特有な奏法を取り入れるのも興味深い。さらに、和太鼓を用いて前奏、拍打ちつなぎのソロも工夫できる。時には普段からなじんでいる鍵盤ハーモニカで2度音程の不協和音をあえて使い、笙の音色を楽しむのもよい。また、百人一首や自作の短歌など国語の教材を関連教材として、それに音楽を入れて表現するなど面白い。オリジナルの作品は子どもたちにとっても愛着のある興味深いものである。また、友だちの作品を聴くことも楽しく、次への意欲に結び付く。活動にあたっては、個人、少人数グループで行うが、図式の楽譜（設計図）に書き込んでいくと分かり易い。実際に音を出しながら修正し作品に仕上げていく。その過程において子どもたちの独自の発想が期待される。活動の途中には、鑑賞も合わせて入れるとよい。やはり、本来の日本の音楽の旋律の特徴に気づいたり、楽器や響きの良さを感じ取ったりすることが大切である。このように、一つの活動はそれのみで終わらせることなく、学年が上がるにつれて進展させていくことや、多くのバリエーションを指導者が持ち合わせることで、子どもたちの興味関心を引き出せることにつながる。

**実践例⑥ 百人一首に音楽をつけよう
（箏とリコーダーを使って）
作品発表の感想（6年生）**

- ・グループの一人一人が作ったふしをつないで長い曲にするために、部分的に音を変えて自然なながれになるようにした。
- ・リコーダーのふしは、楽しい感じがだせるようにした。
- ・最後にことでシャランと鳴らしきれいな感じを出した。
- ・リコーダーを演奏するとき少しゆっくり吹いた。静かに弱く吹き、滑らかな感じをイメー

ジしながら、そこで箏が響くようにゆっくり入ってくる。

- ・日本の感じが出せるようにやさしく、どこか強さもあるように工夫した。
- ・百人一首を詠むとき、エコーをかけるように変わった読み方をしてみた。
- ・ことのソロがあってからリコーダーが出るように演奏の工夫をした。
- ・こととリコーダーやことばがハモるように、最初と最後に高音から低音にポロンとことを入れた。（アルペジオ）
- ・ふしをそのまま弾くのではなく、音を重ねて弾いた。
- ・1段目はこととリコーダーをユニゾンで演奏し、2段目はことを全音符でゆっくりのばして演奏した。
- ・音が途切れないようにした。最後の音をきれいにするため、タラーという感じをいれた。
- ・百人一首の詞が入るところから、リコーダーの音を小さくした。
- ・ことを流し弾きし、昔の雰囲気をつくった。
- ・気持ちを込めて詞を詠むようにした。

高学年になるとイメージしたことを楽器の特性や音色を考えて自分なりの表現することができるようになる。これは、幼児期、小学校低学年からの経験の積み重ねがあってできることである。

音楽の技能だけでなく、音楽の良さを感じ取ることができ、自分の表現に生かしていこうという気持ちが育ってくる。

6. 物語と音楽

詩や短歌、物語に音楽を付けると、世界観が変わってくる。擬音や効果音から始め、挿入歌や様子を表す短いフレーズ、旋律を工夫するなどに発展させたら面白い。絵本は絵によって色や形、様子をイメージして捉えやすい。読み聞かせで耳から言葉（文章）を聞くことで幼児は絵本の世界に入り込む。様子を表す擬音や情景や気持ちを表す音楽がバックグラウンドに流れると、視覚と聴覚の

2つの感覚が相乗効果を生み、子どもたちの想像力を膨らませる。心が揺り動かされ、豊かな感性を育むことが期待される。

実践例⑦ 絵本に音楽を付けよう

(園児対象の読み聞かせ)

始まりの音楽をピアノなどで演奏する。曲は、落ち着いたクラシックの小品が良い。絵本を読む。朗読のみの箇所や、BGMを入れながら朗読する箇所を考えていく。言葉だけで感じる場面も大切にしながら、音楽を入れることでイメージを広げやすくする場面とを入れる。終わりの曲を演奏する。

音楽が入ることで感情の高ぶりも期待できる。言葉だけでは感じられなかった部分も音楽により広がりが生じる。またクラシック音楽を身近に聴くことにもなる。幼児期からクラシック音楽に親しむ環境づくりも大切にしたい。

実践例⑧ 物語に音楽を付けよう 紙芝居

(小学校授業において)

幼稚園で読み聞かせの経験をたくさん持つことで、小学校に入ると自分たちで工夫し発表する活動へと結びつく。身近にある物語がよい。「おむすびころりん」「おおきなかぶ」「かさじぞう」などは国語教材であり、物語のあらすじや登場人物の気持ちも学習しているので、取扱い易い。物語をいくつかの場面に分け、紙芝居を作る。文章の中から、様子を表す部分を見つけ、それを音で表していく。コンコン、キラキラ、ざわざわなど擬音で表しそれを音にしていく。身近な楽器であるカスタネット、トライアングルや、音の高低のあるウッドブロック、ボンゴ、コンガなどで実際に音を出して聴きながら活動するとイメージがさらに広がっていく。2人で音を重ねて表現するのもおもしろい。次に登場人物の気持ちの変化を表すところに短いふしを作っていく。旋律を作りやすいように、鍵盤ハーモニカや木琴、鉄琴など使うのもよい。また、木琴でグリッサンドを入れたり、マレットの種類を色々変え音色の変化を楽しむ工夫もできる。歌も入れると楽しい。物語の中のを

りふの部分に音をつけて歌にする。その際、実際に声を出しながら旋律を付けていくと、決して歌いにくい不自然なふしにはならない。歌いやすい自然な旋律が適している。大まかなかたちが整えば、紙芝居を読みながら音や音楽を入れていく。この活動は8人位の少人数で行うのがよい。一人一人の役割がはっきりし、互いの意見を出し合うこともできるので、それぞれが思いを持って活動できる。発表の機会も、保護者や他の学年に見てもらおうのがよい。子どもたちはよい評価をしてもらうことで意欲と自信を持つ。

7. 幼稚園においての合奏指導

前に述べたように、小学校で児童が自ら創意工夫をする活動にあたっては、幼児期の体験や経験が大きく影響する。音や楽器に興味関心を持つことが第一であるが、何よりも音楽を楽しみ、自分で声を出したり体を動かしたりする表現を数多く体験しておくことである。5、6歳児はリズム打ちや拍を感じることを中心に、身近な楽器を使ったり音楽に合わせてスキップ、歩く、走る、ギャロップ、ジャンプなどをしたりする。普段の生活の中でもこのような動きを音楽に合わせて行くと、自然に体が動き床に足がつくことで拍の感覚を体で覚えていくようになる。楽器は子どもの手の中に納まりやすいカスタネットが初期の段階ではよい。小さなマラカスも両手を使って鳴らすことができる。トライアングルは棒状の撥を持ち左手で持った楽器を鳴らすので子どもによっては難しいが、音色が美しく、興味を持つ。コンガ、ボンゴ、大太鼓など大きな楽器にあこがれる時期でもある。大きな打楽器は、体に直接振動が伝わり、共鳴するのでその感動も大きい。指導者の伴奏に合わせて打楽器を鳴らすことは、合奏の導入に適している。打楽器の奏法も出したい音色によっていろいろ工夫できる。ただ鳴らすのではなく、その楽器の音をよく聴き、音色の特徴や良さに気付くことが大切である。金属でできている楽器の音色の美しさや木でできている楽器の持つぬくもりのある音や、素材や大きさが違う音の高低なども知ることが楽しさに繋がる。指導者自身がそのよ

うな細かいところにも気づいていることが大切である。リズムを教えるにあたっては、音符を用いてもよいが、それをタン、タタなどの言い方をすると混乱してしまう場合がある。難しいことに抵抗を示す子どもも少なくない。そのことで楽譜嫌いになってしまうことも考えられる。そこで、子どもたちが楽しくリズム譜を読み、リズム打ちができるような工夫が必要である。リズムを言葉に置き換えて叩くと、自然にリズム打ちができる。動物の名前、食べ物の名前などが身近で楽しめる。カードにリズム譜と言葉の絵を描いたものを見せ、リズム打ちをする。曲の中でそのリズム打ちを入れる。この活動は、音楽の流れに乗ってリズムを打つ楽しさがある。

実践例⑨ けんぱんハーモニカで遊ぼう

鍵盤ハーモニカってどんな楽器かな
 楽器の構造 音色 演奏の仕方
 取り扱い方を知る

- ・白い鍵盤と黒い鍵盤を数えてみよう
- ・ドの場所をさがそう
 - ♪ 「どんぐりさんのおうち」
- ・指の形は猫の手
 指くぐり（トンネル）
 指のばし
 お引越し
- ・出来るかな？タンギング

息の使い方

- ・音のリレーをしよう
- ・歌に合わせて吹こう

ペアで活動

互いの顔を見てコミュニケーションをするように

- ・まねっこ しりとり 交互奏

みんなで演奏しよう

音楽に合わせて吹く（部分奏）

発表会では、鍵盤ハーモニカ、木琴、鉄琴、グロッケンなども使用できる。ここでもそれぞれの楽器の特性を生かした演奏の工夫がある。合奏で

は、各パートの役割や楽器の音色を生かしたアレンジも必要になる。主な旋律、飾りの旋律、ハーモニー、音楽を支える低音、リズムといったパートの役割や、曲全体の構成も考える必要がある。難しい曲が演奏できたらいのではなく、曲全体としてまとめ、子どもたちが楽しいと思える曲の工夫が大切である。楽しいと感ぜられるのは、一緒に合わせた時拍が合って、時にはいくつかの音だけが聞こえてくる部分や、重なって響き合う部分などがある曲である。もちろんラテンのようにリズムに乗って最後までみんなで息を合わせて演奏する楽曲も楽しい。強弱や速さの変化を楽しむような工夫をすればよい。いくつものパートに分かれている合奏指導は、指導者にとって悩みの種である。方法としては、パートごとに練習して、できるようになったらみんなで合わせていくが、全体で合わず時も少しずつ拍を合わせて進めていくことがよい。拍が合わない状態で行うと、あとの修正が難しい。時にはほかのパートを聴く場面も取り入れるとよい。その際、いくつかの楽器でアンサンブルのような形にすればほかの楽器の音に耳を傾けることになる。合奏で大事なことは拍を感じて合わせ、自分の音や周りの音を意識することである。幼稚園児にとって、周りの音を聴くことは、相当難しいが、指導者がピアノ伴奏をするなど、合奏全体をリードする方法も取り入れたらよい。

8. まとめ

幼稚園、小学校における音楽には、歌う、楽器を演奏する、鑑賞する、など色々な活動がある。活動の方法を工夫し指導者とその都度めあてを明確にして、幼児期から小学校までの長いスパンを見据えて目標達成できるように考えていくことが大切である。音楽表現活動は、音程・リズム・旋律・ハーモニーなど音楽の基礎基本を理解したうえで発展していく部分が多い。そのために指導者は基礎基本の定着を図る手だてとしてリズム遊びや範唱などの常時活動を取り入れたり、日常たくさん音楽を聴いたりする機会を設定する必要がある。また、ペアやグループなど友だち同士で

の活動や、発表する機会を持つことで表現の幅を広げていくことができる。ペアやグループ活動を通して友だちとのかかわり方も学んでいく。音を合わすということは、周りの音に耳を傾けることであるとともに、自分の音にも耳を傾けることでもある。人間関係においても同様である。互いに聴き合う中で認められ自信を持つことや、周りから評価されることで、次への意欲や自信に繋がる。楽器においても、その響きの美しさを感じ、自らも表現していきたいという気持ちを持つことが大事である。そのために指導者は音楽活動の方法を模索し、豊富なバリエーションを持つようにしたい。

9. おわりに

音楽活動を通して自己表現をすることは大切なことである。しかし経験が少ないとその表現方法が難しい。そのため、幼児期よりたくさんの音楽に親しんでいくようにしたい。生活や遊びの中に音楽を取り入れ、声を出して歌い、楽器を演奏することで音楽の楽しさを感じることができる。子どもたちが楽しいと感じることは豊かな表現に繋がっていく。保育者、指導者、音楽のよさを自分自身も知り、音楽活動の方法を創意工夫し、表現活動を楽しむことのできる子どもの育成を目指したい。

